

南京の基督

芥川龍之介

或秋の夜半であつた。南京^{ナンキン}奇望街^{きぼうがい}の或家の一間には、色の蒼^{あを}ざめた支那の少女が一人、古びた^{テエブル}卓の上に頬杖をついて、盆に入れた^{すみくわ}西瓜の種を退屈さうに噛み破つてゐた。

^{テエブル}卓の上には置きランプが、うす暗い光を放つてゐた。その光は部屋の中を明るすると云ふよりも、寧ろ^{むし}一層陰鬱な効果を与えるのに力があつた。壁紙の剥^はげかかつた部屋の隅には、毛布のはみ出した^{とう}籐の寝台が、埃臭さうな帷^{とばり}を垂らしてゐた。それから^{テエブル}卓の向うには、これも古びた椅子が一脚、まるで忘れられたやうに置き捨ててあつた。が、その外は何処を見ても、装飾らしい家具の類なぞは何一つ見当らなかつた。

少女はそれにも関らず、西瓜の種を噛みやめては、時々涼しい眼を挙げて、卓の一方に面した壁をちつと眺めやる事があつた。見ると成程その壁には、すぐ鼻の先の折れ釘に、小さな^{しんちゆう}真鍮の十字架がつつましやかに懸つてゐた。さうしてその十字架の上には、稚拙^{ちせつ}な受難の^{キリスト}基督が、高々と両腕をひろげながら、手ずれた浮き彫の輪廓を影のやうにぼんやり浮べてゐた。

少女の眼はこの耶蘇ヤソを見る毎に、長い睫毛まつげの後の寂しい色が、一瞬間どこ何処かへ見えなくなつて、その代りに無邪気な希望の光が、生き生きとよみ返つてゐるらしかつた。が、すぐに又視線が移ると、彼女はかならず必吐息を洩らして、光沢つやのない黒繻子くろじゆすの上衣の肩を所在なささうに落しながら、もう一度盆の西瓜の種をぽつりぽつり噛み出すのであつた。

少女は名を宋金花そうきんくわと云つて、貧しい家計を助ける為に、よなよな夜々その部屋に客を迎へる、当年十五歳しくわしの私窩子であつた。しんわい秦淮に多い私窩子の中には、金花程の容貌の持ち主なら、何人でもあるのに違ひなかつた。が、金花程気立ての優しい少女が、二人とこの土地にゐるかどうか、それは少くとも疑問であつた。彼女は朋輩の売笑婦と違つて、嘘もつかなければ我儘わがままも張らず、夜毎に愉快さうな微笑を浮べて、この陰鬱な部屋を訪れる、さまざま客と戯れてゐた。さうして彼等の払つて行く金が、稀に約束の額より多かつた時は、たつた一人の父親を、一杯でも余計好きな酒に飽かせてやる事を楽しみにしてゐた。

かう云ふ金花の行状は、勿論彼女が生れつきにも、拗つてゐるのに違ひなかつた。しかしまだその外に何か理由があるとしたら、それは金花が子供の時から、壁の上の十字

架が示す通り、^な歿くなつた母親に教へられた、^{ロオマカトリックけう}羅馬加特力教の信仰をずっと持ち続けてゐるからであつた。